

乳用牛における発情に伴う行動量と乳量の変動

○傍示 和・高橋和裕

(香川県畜産試験場)

【目的】 乳牛の乳量、乳質の遺伝的な改良に伴い生乳の生産性は飛躍的に向上した。一方、牛個体の発情の微弱化や発情持続時間の短縮などによる発情の発見率の低下に伴い、繁殖性は低下傾向にある。近年、発情発見の手段の一つとして歩数計を用いることが多く、発情すると行動量が増加することが知られている。また、発情徴候の一つに「泌乳量の減少」が挙げられており、発情期における行動量と乳量について今回調査した。**【方法】** 平成 30 年 5 月から平成 31 年 1 月にホルスタイン種泌乳牛 5 頭（平均乳量 30.4 kg）を供試した。乳量は午前 9 時および午後 4 時の 1 日合計乳量により調査した。行動量は供試牛の前肢に装着した歩数計で調査した。発情は行動量および外子宮口の弛緩具合や膣粘液の有無により確認した。行動量および乳量は発情日前後 3 日間において調査した。**【結果】** 行動量は最小 1,333 回/日、最大 1,691 回/日、平均 1,455 回/日で変動し、発情日とその前後 3 日間それぞれで有意差が認められた ($P < 0.05$)。また、乳量は最小 29.6 kg、最大 31.4 kg、平均 31.1 kg で変動し、発情日（平均 29.6 kg）と発情日前日（平均 31.4 kg）、発情 2 日前（平均 31.0 kg）および発情 2 日後（平均 31.0 kg）に有意差が認められた ($P < 0.05$)。従って、有意な行動量の増加が認められた日に乳量の減少が見られ、乳量低下から発情牛を発見できる可能性があると思われた。

令和元年度第 69 回関西畜産学会鳥取大会